

子どもの病む世界で

日下隼人



ゆみる出版

子どもの病む世界で

日下隼人

ゆみる出版

著 者 略 歴

1947年 京都市生まれ

1973年 東京医科歯科大学医学部卒業

現 在 武蔵野赤十字病院小児科勤務

現 住 所

武蔵野市境南町2-12-8-510

子どもの病む世界で

1984年 3 月 30 日 初版第 2 刷発行

定価1200円

© 著 者 日 下 隼 人

発行者 田 辺 肇

発行所 株式会社 ゆ み る 出 版

東京都新宿区新宿1-7-10電話03(352)2313・振替東京2-37316

印刷・文昇堂／製本・東和製本

0095-830708-8661

子どもの病む世界で ■ 目次

プロローグ 思い出を育む 7

遙かな友へ——やさしく生きた子どもたち

ユキ 17

ケンイチ 26

クミコ 37

タカシ 52

アキコ 61

トシオ 71

セイコ 86

白い時間の中で

せめて 93

まとめて面倒みる？

シロウトとクロウト

112 103

お母さん、そばにいて

121

さすり続ける

128

白い時間の中で

134

くらしの中の病い — 健康と発達への問い

子どもと出会う

143

若い友人と

151

病むという時空

155

健康と元気の間

159

くらしの底から

171

新しくなった病院で

僕たちのアカデミー

185

新しくなった病院で

194

エピソード

はじめての入院

204

あとがき

213

装丁 河野一平
カバー・扉絵 本田幸雄

子どもの病む世界で

プロローグ 思い出を育む

「七歳までは神のうち」といわれた時代はそう遠い昔のことではない。この何十年かをのぞけば、子どもはちよつとしたことですぐ死んでしまい、人間の一員として数えておかないほうがいい存在だったのだろう。「神」なのだからいつ常世に行ってしまいかもわからなかった。身内などと思わない方が、その子がいなくなってもいくらかは救われたのかもしれない。

数少ない子どもが、たいていは無事育つようになったのはほんの最近のことだ。子どもの死はありふれた出来事から、まれな出来事になった。けれどもそうした転換にもかかわらず、幼い人がその生の入口のところでオトナたちを残して死んでいくことが、残された者にとって救いがなく、不条理で、あまりに悲しいということはいつの世も変わりがないに違いない。そして今日、子どもたちは病院で死に、そこで子どもたちと接する僕たちは何度も何度も後に残されていく。

はじめて自分の受け持った子どもが死んだとき、僕は茫然自失して数日間夢の中にいるよう

だった。

見てはならないものを見てしまったような気もした。そんなことが世の中にあることはもちろん知っていたけれど、目の当たりにしてなお、いや目の当たりにしてかえって、信じられないうし、信じたくないという気もした。子どもときあう仕事をしたいという思いがかなえられ、毎日楽しく遊んでいただけに、その相手が急にいなくなった空白は、悲しみでも埋めようがなかった。

それからちょうど十年、一人の癌の子ども、サチコが危篤状態になったとき、僕は両親に何度か「つらい気持ちはよくわかります」と言ってしまった。そのときその言葉を言ってしまった自分、言ってしまったようになっていて自分にあらためてがっかりした。患者が死に、解剖を依頼するようなとき「ご両親のつらい気持ちはよくわかりますが」と言ったりする医者の常套句に、僕はずっとしっくりこないものがあつたし、誰かがそう言うたびに内心すごく反発していた。「医学の進歩のために」「これからの同じ病気の人のために」といったよく使われがちな言葉もいやだった。

自分の子どもが死ぬというこのうえない個人的なことが起きた直後に「医学の進歩のために」といった言葉を言われることに、人が耐えられるとは思えなかった。そんなふうに自分を納得させる場合が人間にはあるにしても。本当の悲しみは、その内へのどんな介入をも拒んでしまうもののように思える。

それなのに「つらい気持ち」がわかられてしまうとは何ということだろう。もうそれは何としても悔やしいとしか言いようがない。

子どもを亡くした母親が、その子どもが死んでだいぶたってから僕のところに来て「主人と話してもどうしてもすれ違ってしまうんです。どこかズレがあつて『こんなこともわかつてもらえないのか』って思ってしまったります。まだ先生と話した方が通じるんじゃないかと思つて来たんです」と言ったことがある。子どもを亡くした父親と母親とですらわかりあえないのだ。まして他人に何がわかるというのだろうか。

子どもを亡くした親の気持ちかわからないのは、僕の「想像力」が貧困なせいなのだろうか。けれども、人と人とはそうわかりあえるものではないと思う。想像はできてもわかりはしないだろう。僕は自分の子どもが今死んだらこんな思いをするだろう、こんなに悲しいだろうとは想像できる。しかし、それは現実には自分の子どもが死んだときの気持ちとは異質なものである。まして生まれも育ちも、子どもとの関わりも異なる他人の気持ちとは別のものだろう。

病氣の人はその人の、そして家族もまた各々の、苦しみや悲しみを一人で引き受け耐えていくしかない。そうすることでは人間は成長しないとすれば、病いに耐える者はすでにそのことで決定的に僕たちにまさっている。

僕たちにそんな人の「気持ちがよくわかる」はずがない。

「つらい気持ちはよくわかります」というのは言葉のアヤだ。言葉のアヤに目くらまをたてて

いたら生きてはいけない。それでも言葉のアヤだと言ってすませたくない。そう思ってきたのに、いつか「気持ちが変わります。」と言ってしまっていた。医者にそう言われる親たちの涙は、「本当に私の気持ちが変わるのですか。あなたたちに、親の無念さがわかりますか」と言っているに違いない。

僕たち病院に生きる人間にとって、他人の死とはいったい何なのだろう。

病氣と死とは隣りあわせにあるもののなのに、病院というところは死との無縁を装っているようなところがある。病院とは人が必ず治っていく場であるかのように。時折の死は、よほど運が悪いが、天寿を偶然病院で終えただけのことであるかのように。そして死はすばやく片づけられ、何事もなかったかのようにまた全てが流れていく。現代そのものが死を「故意に」無視して成り立っている。死は病院という壁の中の出来事であり、ブラウン管の向こうの出来事であり、そしていつも赤の他人の出来事だ。高層ビル、モダンなまちなみ、立ち並ぶマンション——少なくとも今日の都市はそのどこにもかけりがなく、そこでは死は抹消されている。

死が至るところに満ちている病院で働く人間にとってさえ、死は他人の遠い死でしかない。病院で働く人間も、死と接する特別な人間であるよりは、現代人の一人なのだ。他人の死と身を接することが自らの生を死の蔭の下で問い直す契機となることはまれなようだ。

他人の死は他人に起きた出来事、自分はいつまでも生きるかのように、他人の死を自分の生とは無縁のものとして向こうに追いやってしまうことで僕たちの日々の平穏が保たれているこ

足で入りこまないでも、また知らないところ、わざと見ないでおくところがあってもその人とはつきあえる、もしかしたらむしろそのほうが人とはつきあえるということ。そのようなことを自分に言いかさなければならぬようなところに、僕は生きている。

何歳の人であっても、どんな病氣であっても、病氣になるとき人は、死を垣間見ているに違いない。そこで人は不安を受けとめ、ひとりでじっと耐えて生きているのではないだろうか。子どもの不安は、オトナの不安とはいくらか違うものかもしれないが、それは、不安というものが一人ひとり違うという程度の違いなのだろう。何歳の子どもであっても、不安と苦悩の中にいるにちがいない。オトナにさえなれないかもしれない無念さもあるだろう。僕にできることと言えば、垣間見えてきた死を見つめ、耐えて生きている人を見守り続けていくこと、さりげなく変わりなくつきあい続けていくことしかないさそうだ。言葉をかけることだけがつきあいではないのだ。自分も、明日をも知れぬ生を生きている人間だということで、死から目をそらさずに自然に、いつでも誰とでも同じようにつきあっていきたい。

人と人とのつきあいはいつでもどちらかの死によって断たれる。つきあいにはいろいろな形がある。最後まですれ違ったり、どうしても「出会え」なかったり、あるとき訣別してしまうものもあるが、それらの全てを含めてどちらかの死の日までつきあいは続いているといえそう。そう考えるならばもう、病氣の人とのつきあひも、他の人とのつきあひも変わることはな

い。出会っている今を大切にし、一日一日自分がつきあい続けたいようにつきあい続けたいこと。つきあいを積み重ねていくことだと思う。そうした中で、自分のうちにつきあったという人思い出√を育み、そのひとこまひとこまを心の中に沈めていきたい。僕のささやかな人生で出会った人と、存分につきあったという思いで自分の生を終えたいと思うし、その思いにこだわりながら今のつきあいを続けたい。僕たちがこの世に生をうけ、存在し、知りあい、つきあったということだけは、少なくとも否定されえない確かなことなのだから。

一けれども、もし死のときに、あちらに、たった一人の愛し信じ、頼れる人がいれば死は平安に充たされるでしょう」(加賀乙彦『宣告』)

あちらとは、生、死のどちらの側もあてはまるのだらう。

自らの子どもを失うという深い悲しみの中にいる人の気持ちにはわからないけれど、心が通いあうことはあるかもしれない。僕もまた死ぬべき人間として、この世で出会い、つきあい、楽しい時を共に過ごすことのできたその子どもの死を憤り、その死を悲しんでいる、ということ。それは人の生きることの中に満ちている哀しさ、その中に浮かぶ島々のような喜びを見つめ、自分がつきあったという思い出のひとつまひとこまをいとおしみ育むときふと開ける出会いのようなものかもしれないのだ。自分のつきあった人の死が悲しく悔やしいといういわばあたりまえの気持ち、いつまでも抱き続けることだけが僕にできることなのだろう。そのとき実はもう八出会っている✓と言ってもよいのかもしれないのだ。

僕を残して逝ってしまった子どもたちのことをここで書くことも、僕にとっては積もった思
い出をいとおしむことであり、墓碑銘を刻むことだと思う。ただ書いてしまうことでかえって
そのために少なからぬものを見失ってしまうことをおそれながら。